



地面を離れて空高く飛ぶために。「恐怖心よりも好奇心」。だれしもが恐怖心と戦うが、森川さんはポジティブにとらえて競技へ挑む。その気持ちがいい助走を生み出している



自身2度目の出場となった南九州大会。1年前には飛ぶことのできなかつた高さをクリア。高いレベルで競えるほどに成長した(写真=南稜高校提供)

どんな舞台だって
攻めの姿勢を忘れない。

県高校総体棒高跳び3位
同南九州大会9位
南稜高校3年 下村

森川勝己

Katsuki Morikawa



県高校総体陸上・男子棒高跳びは6月2日にえがお健康スタジアムで行われ、南稜高校陸上競技部主将の森川勝己さん(同校3年II下村)が3位入賞。6月15日に沖縄県で開かれた南九州大会の舞台に立った。

体調不良でも自己ベスト

県総体を迎えるまでの自己ベストは昨年の秋に記録した3^位90^{センチ}。ことしの県総体は最低でも3位入賞が目標。当日発熱し、体調は最悪の状態だったが、4^位の壁をクリアしてみせた。「助走はよかったが、踏み出しの部分で若干スピードが乗らなかつた。もっといけたと思う」と森川さんは自身の最高記録にも反省した。

一つ上のレベルで戦えた

南九州大会は県大会から一気にレベルが上がる。スタートは3^位60^{センチ}から。それは1年前、自己ベストの高さだった。当時は飛ぶことができず、結果は「記録なし」。悔しい思いをした。リベンジを誓った。

迎えた2度目の南九州大会。ことしの目標は6位入賞し、インターハイに行くこと。飛んだ高さが同じ場合、試技^{*}の少なさで勝負が決まる棒高跳び。序盤の失敗は大きく響く。

その序盤。プレッシャーが森川さんを襲い痛恨のミス。取り返そうと3^位90^{センチ}を跳び、森川さんは勝負に出る。4^位をパス。挑んだのは4^位10^{センチ}。高さは足りていた。ポールの押しがわずかに弱く、バーに体がふれた。結果は9位だった。「記録には満足していないが、一つ上のレベルの選手たちと同じ場所で競えたことはよかつた」と森川さんは最後の総体を振り返る。

2刀流からの選択

中学時代は人吉球磨郡市の大会で3000^{メートル}1位。長距離選手として活躍した。入学当時も長距離の選手として入部。棒高跳びと出会ったのは1年生の夏だった。技術を駆使して高く飛ぶところに魅力を感じた。監督に相談

成長を実感する喜び

始めたばかりのころは、うまく飛べなかつた。「的確な指示で、ずっと信じてやってきた」と棒高跳びを専門とする山崎圭三^{けいぞう}監督に指示を仰いだ。

ポールの反動を使う感覚やタイミン^グは反復練習で培い、自分の体に叩き込んだ。体操競技のような体の使い方やしなやかさは、吊り輪や鉄棒、トランポリンなどの器械運動で養った。記録はほとんど伸び始めた。「勝てなかつた相手に勝つ喜びを実感した」と棒高跳びにのめりこんでいった。

4^位30^{センチ}を越えたい

「記録が伸びると、まわりの人も喜んでくれる。喜びを分かち合うことがうれしい」と主将は実力でも部員を引っ張ってきた。長距離の練習にも交じり、自身の競技外でも部を盛り上げた。

次は秋の国体に照準を合わせる。「自己ベストを出して終わりたい。4^位30^{センチ}を飛ぶことが目標」。森川さんは攻めの姿勢を忘れない。さらなる高みを目指している。

Profile

中学時代から長距離選手として活躍し、南稜高校陸上競技部に入部。高校1年生の夏に棒高跳びに興味を抱き、長距離と棒高跳びの2刀流で競技。2年生の夏から棒高跳びに専念。昨年に引き続き2度目の南九州大会出場。自己ベスト4^位00^{センチ}。リーダーシップを発揮し、主将としても部を引っ張った。

※棒高跳びは3回続けて失敗するまで挑戦できる